



国定忠治の磯沼浚渫工事

その1

東日本建設業保証株式会社
建設産業図書館
江口知秀
Tomohide Eguchi

群 馬県伊勢崎市の「つつみ公園」から東に歩いて約一五分で、養寿寺に着く。ここには、あの国定忠治の墓があるのだ。「赤城山も今宵かざり」のくだりは有名だが、今の若者は知らないらしい。平成十八年に群馬大学の社会情報学部が学生を対象に、アンケート調査を行ったところ、赤城山と聞いて国定忠治を挙げた者は皆無だったとか。

それはさておき、忠治の墓は、本堂に向かって左の墓地の奥にあり、彼の一族は長岡氏を名乗っていたから、墓碑には長岡忠治之墓と刻まれている。国定は忠治の故郷の村名で、昔の博徒は故郷の地を通り名として使っていた。

彼の墓碑は、長岡家の墓で囲まれている。忠治は嘉永三（一八五〇）年に四十一歳で磔刑に処せられるが、実弟の友蔵は「性質徳実恩厚」と墓碑に刻まれた人物で、養蚕・生糸業で財をなし、その血は今に受け継がれているからだ。

さて、武闘派アウトローの極めつけとして、短い生涯を終えた忠治だったが、天保の大飢饉の折に人助けをしたなどと、自分のなわばりについては、よく気をくばっていたという言い伝えがある。

川路聖謨や江川英龍とともに「幕府三人兄弟」と呼ばれた羽倉外記は、忠治の実像を伝える数少ない

史料『赤城録』を記した。羽倉は幕府の役人であり、忠治と敵対する側の人物でありながら、『赤城録』では次のように記している。「天保七年は日照りがつき、関東地方は大飢饉となった。忠治は、ありたけの私財を提供して、困窮している人々を助けた。このため、赤城付近では餓死者がなかったという。私（羽倉）は赤城に隣接する緑野郡の代官を勤めていたが、餓死者を出してしまった。忠治のことを聞いて赤面し、背中に冷や汗が流れ、入る穴がないことを恨んだ。」

幕府の役人、それも能吏と呼ばれた人物が、博徒についてこのような記録を残すとは驚きだが、続いて「翌天保八年の春。忠治は田部井村に大賭博場をつくり、その寺銭で村内の磯沼の浚渫を行った。国定は田部井の隣村で忠治の故郷であり、磯沼の下流にあるから、浚渫で早害も救えるというわけである。」とあり、忠治が故郷を救うため、灌漑用池の磯沼を浚渫したと書かれている。国定忠治の災害救済工事というわけだ。

しかし、この磯沼の場所がよくわからない。地図を見ながら養寿寺を出ると、山門前で急に声をかけられた。うかつなことに、通行人と鉢合わせしたことも気づかなかったが、見ると博徒の大親分といっ

ても通用しそうな貫緑のご老人が、どこから来たのかとニコニコと笑っている。一瞬、国定忠治の姿が頭をよぎった。

JR国定駅から女堀の「つつみ公園」を経て、ここまで三キロ以上歩いてきても歩行者は誰もいなかったのに、忠治の菩提寺の前で彼を彷彿とさせる人物に行き会った。これは偶然か？ はたまた何かの因縁か。（つづく）



国定忠治の墓碑

[交通] JR両毛線 国定駅から徒歩約10分